

『人間と宗教』

2022年03月15日

岩波の月刊誌『世界』に、寺島実郎氏が「能力のレッスン 本質を見抜く眼識で新たな時代を切拓く」の寄稿を連載している。239回に及んでいるので、20年近く連載していることになる。寺島氏は、経済、政治に関わる識者であるが、最近、宗教に関わる論者が多く、その洞察の深さに敬服していた。昨年の11月、それらの宗教論をまとめて、『人間と宗教 あるいは日本人の心の基軸』を上梓している。その冒頭は、「私自身は宗教者ではない。特定の宗教に帰依しているわけでもない。ビジネスと社会科学の世界を生きてきた人間である。その私が、仕事を通じて世界を動き回り、仕事における課題を解決するために現地の人たちと真剣に向き合ううちに、宗教への関心を深めることになった、何故ならば、世界は宗教に溢れており、本気で意思疎通するには相手の思考回路と精神性を理解する必要があり、宗教は避けて通れないのである」と書き始めている。納得できる。

寺島氏は、神仏が人間を造ったのではなく、人間が神仏を造ったのであって、人間の特質とも言える「自らの存在の意味を問い掛ける動物」として進化した結果、自らを制御する存在としての神仏を創造せざるを得なかったと言う。また、人間は、人智を超えた「聖なるもの」に惹かれ、内なる価値に動かされて宗教心を持つに至り、その宗教心が、2500年ほど前、中東の一神教（起源としてのユダヤ教）、仏教などを生み出していったと言う。

寺島氏は、世界宗教としてのユダヤ教、キリスト教、イスラム教、仏教など、諸宗教の起源と、歴史の中でダイナミックに躍動してきた働きを、深い学識をもって論述している。改めて、宗教が歴史に膨大なエネルギーを与え、人間は皆、このような過去の壮大な伝承に生かされていることを知り、偉人たちの真摯さに襟を正された。

多くのことを教えられたが、興味深い一つのことをまず書きたい。イスラム教は、人間を神と見なすことはなく、イエスも預言者の一人としている。ネストリウス派は、イエスの「人性」を主張したため、異端として排斥された。イスラム教の教祖ムハンマドが最初にキリスト教を学んだのはネストリウスの修道士によったという。また、イスラム世界はヘレニズム文明を継承し、ギリシアの学問の文献を集積した。欧州で失われた文献のアラビア語からの再翻訳により、15世紀のルネッサンスがもたらされる契機となった。更に、十字軍のローマからエルサレムまでの遠征が、教皇や皇帝の権威を相対的に認識させ、16世紀の宗教改革の伏線になったと言える。他文化、文明と出会うことによって、自らを認識し、この世に起こる全てを相対化し、新しい文化を創造する英知を得ていったのである。

寺島氏の関心は、本書の副題「あるいは日本人の心の基軸」にある。大戦中、天皇を「現人神」とする強固な国家神道に洗脳されていた。敗戦を機に、「宗教なき社会」になった。代わりに、工業生産力に基づく経済第一主義をひた走ってきた。驚くべき成長で、1994年には、世界GDPの17.9パーセントを占めるようになった。しかし、2020年、世界GDPの日本の比重は6.0%までに下落した。経済における埋没は、全てを失うほどの喪失感をもたらした。今、日本人の心の基軸をどこに置くのかが問われている。仏教、神道、儒教を担った人たちを文明史的な視点で読み解き、戦後の歩みに焦点を合わせている。

寺島氏は、戦後の日本は宗教性が希薄になったが、無宗教者の宗教性が大事で、それは「一切の生きとし生きるものは幸せであれ」という、他者の苦痛への共感が生み出す静かな「利他愛」を持ち、「レジリエンス（復元力）」を取り戻すことではないか、と結論付けている。D・ボンヘッファーの「神の前で、神と共に、神なしで生きる」という言葉を思い起こす。人類が築いてきた多様な宗教性が、これを可能にすると信じたい。